

「不動法」ご真言和訳ノート

「不動法」は、不動明王を本尊とする諸尊（念誦）法の一つながら、「不動護摩法」にも通じ、「十八道」立ての基本的な念誦法として本宗大徳の間でよく修せられていて、已達の真言行者にとって身ぢかな観法であり、自坊のご本尊の念誦法に不案内の場合、―本来は、釈迦如来や薬師如来や阿弥陀如来や観音菩薩や地藏菩薩などがご本尊の場合、それぞれの本尊念誦法を自ら案じて「次第」を作っておくべきであるが―、それが叶わない場合にはこの「不動法」で代替することも可となっている。

ここに使用した「次第」は、昭和四十年十一月二十八日、布施浄戒阿闍梨監修のもと、大津頼宥僧正の浄書により、上野頼榮事務長（宗務総長）を発行者として、総本山智積院より刊行されたもので、この刊行にあたって師父長澤實導が刊行委員になっていたらしく、委員として本「次第」を総本山より贈呈されている。

なお、このノートは真言の和訳が主旨であり「次第」の内容に立ち入るものではないので、観（想）文（「観ぜよ」）「想え」ではじまる文）をはじめ所作や真言に関する記述及び宝号（「南無」ではじまる礼仏など）ならびに経文（「懺悔随喜」）などは省略した。

また、作法を「如常」としたり、作法説明中に出てくるご真言を書き出すなど多少変更を加えた

また、「禮佛」中に（前後二回）出てくる五大明王（不動・降三世・軍荼利・大威徳・金剛夜叉）への帰依の真言は、「次第」に表記されている悉曇からサンスクリット（ローマナイズ）に変換がなされた参考文献が見当たらないため、不肖私が還梵したものである。もし誤りがあったらご叱正をお願いする次第である。

不動法

自房中至仏前 作法如常

先 壇前普禮 香呂・珠・杵を取り三礼

おん さらば・たたぎやた・はんな・まんなのう きゃろみ

Om sarva=tathāgata-pāda=vandanam karomi

オーン、私は一切如来の御足に(頭をつけて)頂礼します。

次 着座 半跏座

次 辨供 作法如常 作法中慈救咒

次 開次第 本尊の白毫を觀じ摺念珠 置念珠(三匝にして脇机の上) 薰香

次 着座普禮(前にあり) 金剛合掌 三返

おん さらば・たたぎやた・はんな・まんなのう きゃろみ

次 塗香 作法如常

五分法身を磨瑩すと想え、

次 三密観 蓮華合掌 三返

うん うん うん

Hum hum hum

フーン、フーン、フーン。

次 淨三業 前印 五返 五処加持

おん そは・はんば・しゆだ さらば・たらま そは・はんば・しゆど かん

Om svabhāva=suddhāṅ sarva=dharmāṅ svabhāva=suddho 'ham

オーン、一切の(諸)法(観想の対象の实体とみなされる属性)かたちや性質(は本来(自性)清浄なものであり、私も本来清浄です。

次 佛部三昧耶 印如常 三返

おん たたぎゃと・どはんばや そわか

Om tathagata=udbhava svāhā

オーン、如来(＝仏)(部の諸仏)の出生に 成就あれ。

次 蓮華部三昧耶 印如常 三返

おん はんどほ・どはんぼや そわか

Om padma=udbhavāya svāhā

オーン、蓮華(部の諸仏)の出生に 成就あれ。

次 金剛部三昧耶 印如常 三返

おん ぼぞろ・どはんぼや そわか

Om vajra=udbhavāya svāhā

オーン、金剛(部の諸仏)の出生に 成就あれ。

次 被甲護身 印如常 三返

おん ばざら・ぎに・はらちはたや そわか

Om vajra=agni=pradīptāya svāhā

オーン、金剛(のように堅固な)諸魔を焼き尽くす(火の燃える輝きに 成就あれ。

次 加持香水 作法如常 二十一返

おん あみりてい うん はった

Om amrite hūm phat

オーン、甘露(軍荼利(明王))よ、フーンハット。

ラン・バン加持

観ぜよ水の底にラン字有り、
観ぜよ水の底にバン字有り、

洒水

想え毘盧遮那バン字大悲の水を以て、

次加持供物 小三鈷印(三鈷杵) 三転 三返

おん きり きり ばざらうん はうた

Om kili kili vajra hūm phat

オーン、概よ 概よ 金剛(杵)よ、フーンハット。

珠を脇机に置く(作法如常)

次 覧字観 金剛合掌 三返

らん らん らん

Ram ram ram
ラン、ラン、ラン。

次 淨地 前印 三返

おん あらじゆ はぎやたく さらば・たらまく

Om rajo 'pagatah sarva-dharmāh.

オーン、塵垢を遠離した一切の(諸)法よ。

次 觀佛 前印 三返

けん ばぎら・だと

Kham vajra-dhāto

カム(虚空よ)、金剛の(ように堅固な)世界(の諸仏)よ。

次 金剛起 印如常 三返

おん ぼぞろ ちしゆた うん

Om vajra tisṭha hūm

オーン、金剛(杵)よ、起ちたまえ。フーン。

次 普禮(前にあり) 金剛合掌 一返

おん さらば・たたぎやた・はんな・まんなのう きやろみ

次 表白 開白の時のみ唱える 珠・呂を取る 金二丁

敬(うやまつ)て本覚法身大日如来

次 神分 開白の次の座から表白を省きここに飛ぶ 作法前に同じ

令法久住利益人天護持弟子悉地円満の為に

摩訶毘盧遮那宝号 一丁

観自在菩薩 一丁

金剛手菩薩 一丁

外金剛部金剛天等を始め奉つて

仰ぎうけたまわり乞う

次 五悔 珠を左腕に掛け 金剛合掌

一切恭敬

次 淨三業(前にあり) 金剛合掌 三返

おん そは・はんば・しゅだ さらば・たらま そは・はんば・しゅど かん

次 普禮(前にあり) 金剛合掌 一返

おん さらば・たたぎやた・はんな・まんなのう きやろみ

歸命十方一切佛々

次 發菩提心真言 金剛合掌 一返

おん ぼうじ・しつた ぼだはだやみ

Om bodhi=cittam utpādayāmi

オーン、私は菩提心を發起せしめています。

次 三昧耶戒 金剛合掌 一返

おん さんまやさ とばん

Om samayas tvam

オーン、(発心した)あなたは(仏と)等同(平等、不二一体)です。

※三昧耶戒真言…ほかに次の二例がある。

①おん さんまや さとぼん

Oṃ samaya satvam

オーン、(仏と)等同(平等、不二一体)の薩埵(金剛薩埵)に帰依します。

②おん さんまや さとぼん

Oṃ samaya svam

オーン、(生仏の)等同(平等、不二一体)よ、金剛薩埵(ストヴァム)よ。

オーン、誓戒(三昧耶戒)よ、ストヴァン。

次發願 左手珠 金一丁 晴の時は勸請を用う 珠・呂・杵を取り金は打たず

至心發願

次五大願

衆生無邊誓願度

次普供養 印如常

おん あぼぎゃ・ほじゃ まに・ほんどま・ばじれい たたぎゃた・びろきてい さんまんだ・

はらさら うん

Om amogha-pūja maṇi-padma-vajre tathāgata-viokite samanta-prasara hūm
オーン、利益ある供養よ、宝珠と蓮華と金剛(の徳)をもつ如来の観察に普く遍満するものよ、フーン。

次 三力偈 印如常

以我功德力

左腕より珠を取り 金一丁 珠を脇机に置く

次 大金剛輪 印如常 三返

のうまくしつちりや・ちびきゃなん たたぎゃたなん あん びらじ びらぢ まか・

しゃきゃらら ぼじり さた さた さらてい さらてい たらい たらい びだ・まに

さんばんじやに たらまち・した・きりや たらん そわか

Namah tri-advikāṇaṃ tathāgatānaṃ aṃ viraji viraji mahā-cakra vajri sata sata sārāte
sārāte trāyi trayi vidhamani sambhāṇiṇi tramati-siddha-gya trāṃ svāhā

三世の諸如来に頂礼します。塵垢を遠離したものとよ、塵垢を遠離したものとよ、大輪よ、金剛(のよ)りに堅固なものよ、等しいものよ、等しいものよ、堅固なることよ、堅固なること

よ、救済するものよ、救世するものよ、除去するものよ、破壊するものよ、三慧成就の最善なるものよ、トラーン、成就あれ。

次 金剛橛(地結) 印如常 三返

おん きりきりばざら・ばじり ほら まんだ まんだ うん はった

Om kili kili vajra=vajri bhūr bandha bandha hūm phat

オーン、橛よ、橛よ、金剛(のように堅固)にして堅固な大地よ、結縛したまえ、結縛したまえ、フーン ハット。

次 金剛牆(四方結) 印如常 三返

おん ならなら ばざら・はらきやら うん はった

Om sara sara vajra=prakāra hūm phat

オーン、堅牢にして堅牢な、金剛(のように堅固な)垣根よ、フーン ハット。

次 道場観 如来拳印 七処加持 各一返

壇上に阿克字有り変じて五峰八柱の宝楼閣と成るゝ

おん ぼくけん

Om bhūh kham

オーン、大地よ、カム(虚空よ)。

想え此の世界を変じて清浄刹土と成す

次 大虚空蔵 印如常 三返

おん ぎやぎやのう・さんはんば・ばざら こく

Om gavana=sambhava=vajra hoh

オーン、虚空から生ずる金剛(のような堅固さ)よ、ホーホ。

次 小金剛輪 印如常 三返

おん ばざら・しゃきやら うん じゃくうん ばん こく

Om vajra=cakra hūm jah hūm bam hoh

オーン、金剛(のように堅固な輪(法輪)よ、フーン、ジャハ(召し)、フーン(引し)、バン(縛し)、ホーホ(喜せしむ)。

次 寶車輅(送車輅) 印如常 三返

おん ところ ところ うん

Om. turu turu hūm

オーン。(諸仏の浄土へ)渡り行きたまえ、渡り行きたまえ、フーン。

次 請車輅 前印 中指で招くこと三度 三返

のうまくしつちりや・ちびぎゃなん たたぎやたなん おんばざろう・ぎによう・
きやらしやや そわか

Namah tri-adhvikanām tathāgatānām om vajra-agni-ākarsāya svaha

三世諸仏に頂礼します。オーン、金剛の(ように堅固な)火の燃え輝くことに 成就あれ。

次 召請 印如常(あるいは大鈎召印) 三返

おん あろりきや えいけい えいき そわか

Om alolik ehi ehi svaha

オーン、泥土から生じたもの(清浄蓮華)よ、おいでください、おいでください。成就あれ。

次 四明 印如常 三返

じゃく うん ばん こへ

Jah hūm bam hoh

ジャハ(召し)、フーン(引し)、バン(縛し)、ホーホ(喜せしむ)。

次 拍掌

舞儀三度 作法如常

聖衆を歡喜せしむ

拍掌三度 作法如常

おん ばぢら・たら・としゃ ころ

Om vajra-tala-tusya hoh

オーン、金剛の(ように堅固な)掌の悦びよ、ホーホ。

次 結界 降三世印

おん そば にそぼ うん ぎやりかんだ ぎやりかんだ うん ぎやりかんだ。はや うん

あのうや ころ ばぎやばん ばぢら うん はつた

Om saumbha nisumbha hum grīṇa grīṇa hum grīṇāpāya hum anaya hoh bhagavan vajra
hum phat

オーン、シュンバ(尊)よ、ニシュンバ(尊)よ、フン、捕えたまえ、捕えたまえ、フン、捕えさせた
まえ、フン、引き連れたまえ、ホーホ、世尊よ、金剛の(ように堅固な)者(尊)よ、フン、パッ
ト。

次 金剛網(虚空網) 印如常 三返

おん びそほらた らぎしゃ ぼぢらら・はんじやら うん ほとた

Om visphurād rakṣa vajra-pañjara hūm phat

オーン、拡げ張ることにより守護したまえ。金剛の(ように堅固な)網よ、フーンハット。

次 金剛炎(火院) 印如常 三返

おん あさんま・ぎに うん ほとた

Om asama=agni hūm phat

オーン、無比なる火よ、フーンハット。

次 大三昧耶 印如常 三返

おん しょうぎやれい まか・さんまえん そわか

Om śrikhale mahā-samayam svāhā

オーン、(三鉢を連結した)鏤よ 絶大なる一致(結縛)よ、成就あれ。

次 闕伽

左手闕伽印に器を置き 右手三鉢印にてラン字三度唱えつつ闕伽器加持

闕伽印 作法如常

のうまく・なまんだ・ぼだなん　ぎやぎやのう・なんま・なんま　そわか
Namañ samanta-buddhāñm gaganā-sama-asama svāha
遍く諸仏に頂礼します。虚空に等しく無比なるものよ、成就あれ。

以本清浄水ゝ

次 蓮花座　八葉印　三返

おん　きゃまら　そわか

Om kamala svāhā

オン、(紅)蓮花よ、成就あれ。

次 振鈴

右手で五鈷杵・鈴を取る

おん　ばぢら・さとぼ　あく　一返

Om vajra-sattva ah

オン、金剛薩埵よ、アハ。

杵を左手に移し左腰に安んじ 右手の杵を三度抽擲 右手の杵を右前上にて逆順に三転
身の五処加持一転 虚空加持一転 慈救咒各返 杵を右乳下に持す 振鈴作法・明如常

おん ばざら・げんだ・としゃ こんく

Oṃ vajra=ghaṇṭa=tusya hoh

オーン、金剛(のように堅固な)鈴の悦びよ、ホーホ。

鈴を右手に移し 鈴・杵を金剛盤の本処に返し置く

次 五供養印明(前供養、理供) 火舎の右の供具 印如常 各一返

先 塗香

のうまく さまんだ・ぼだなん びしゆだ・げんど・どはんばや そわか

Namaḥ samanta=buddhānaṃ visuddha=gandha=udbhavāya svāhā
遍く諸仏に頂礼します。清らかな薫香の出生に 成就あれ。

次 華鬘

のうまく さまんだ・ぼだなん まか・まいたりや・びゆどぎやてい そわか

Namaḥ samanta=buddhānaṃ mahā=matrya=abhyaṅgate svāhā

遍く諸仏に頂礼します。大慈悲の顕現よ、成就あれ。

次 焼香

のうまく・さまんだ・ぼだなん たらま・だど・ばどぎやてい そわか

Namaḥ samanta=buddhānāṃ dharmā=dhātu=anugate svāha

遍く諸仏に頂礼します。法界に随入するものよ、成就あれ。

次 飲食

のうまく・さまんだ・ぼだなん あらう・きゃらう・ぼりん だだび ぼりん だてい まか・

ぼりく そわか

Namaḥ samanta=buddhānāṃ arara=karara=balin dadāmi balin dade mahā=bali svāha

遍く諸仏に頂礼します。覆いをした施食を私は施与します。私は施食を施与します。大いなる施食よ、成就あれ。

次 燈明

のうまく・さまんだ・ぼだなん ただぎやた・あらう・そはらだ・ばんぼらのう きやぎやのう・

だりや そわか

Namaḥ samanta=buddhānāṃ tathāgata=arci=sphuraṇa=vahāsana gagana=udārya svāha

遍く諸仏に頂礼します。如来の光焰のきらめきの照明よ、虚空の(ように)広大なものよ、成就あれ。

次 事供(前供養) 火舎の右の供具 作法如常

先 塗香

次 時華四房の華のうち向う側中央の一房を闕伽器の向うに、左の一房を塗香器の向うに、右の一房を華鬘器の向うに、置く

次 焼香

次 飲食

次 燈明

次 四智讚 金剛合掌 垂帶 舞儀三度 拍掌三度 作法如常 一返

おん ぼぎらら・さとぼ そうぎやらか ぼぎら・あらたんのう まどたらん
ぼぎらら・たらま・きやたら ぼぎらら・きやらま・きやろ はんば

Om vajra-sattva-saṃgrahāḍ vajra-ratnam anuttaram

vajra-dharma-gāyanaiḥ vajra-karma-karo bhava

オーン、

金剛薩埵(に象徴される堅固な菩提心 〓 円明無垢な金剛智)を(本有し)保持するから(大

円鏡智、阿闍如来の仏徳）、

金剛の（ように堅固な、無差別平等なサトリの智慧である）宝（如意宝珠）はこの上なきものである（平等性智、宝生如来の仏徳）。

（慈悲を以て衆生をよく観察し）金剛の（ように堅固な）教法を詠ずる（説法することによって）妙觀察智、阿弥陀如来の仏徳、

（あなたは）金剛の（ように堅固な）行い（利他行）を實踐する者となれ（成所作智、不空成就如来の仏徳）。

次 本尊讚 金剛合掌 三返

のうまくさらば・ほだ・ぼうじ・さとばなん さらばたら そうくそうびだ・びじゃ・らし
ぐいのうぼう そとてい そわか

Namah sarva-buddha-bodhisatvanam sarvatra samkusumita-abhijñā-rāṣi vai namo 'stu te
svāha

一切の仏・菩薩に頂礼します。一切処において、開花した神通智を積み重ねた者（尊）よ、
あなたに敬礼します。

次 普供養印明（前にあり） 印如常 三返

おん あほぎゃ・ほじゃ まに・はんどま・ばじれい たたぎゃた・びろきてい さんまんだはら

さらうん

次 三力偈 印如常 三返

以我功德力

次 祈願 金剛合掌

普供養摩訶毘盧遮那佛

次 禮佛 金剛合掌 各一返

曩謨摩訶毘盧遮那佛

なも ありや・あしやらのうた びじや・らんじや

Namo ārya-acala-nātha vidyā-rāja

頂礼します。聖なる不動尊者なる明王よ(不動明王)。

なも ぼんじや・そぼじや びじや・らんじや

Namo vajra-śumbha-ni(śumbha) vidyā-rāja

頂礼します。金剛の(ように堅固な)シムンブ・ニシムンブ(降三世・勝三世)なる明王よ(降三

世明王)。

なも ばざら・ぐんだり びじゃ・らんじゃ

Namo vajra=kuṅḍalī vidyā-rāja

頂礼します。金剛の(ように堅固な)軍荼利(クンダリー)とぐるを巻いた蛇(コブラ)、シャクテイ・精力)なる明王よ(軍荼利明王)。

なも ばざら・えんまんどくきゃ びじゃ・らんじゃ

Namo vajra=yamātaka vidyā-rāja

頂礼します。金剛の(ように堅固な)忿怒王(ヤマーンタカ、焰鬘得迦)なる明王よ(大威徳明王)。

なも ばざら・やきしゃ びじゃ・らんじゃ

Namo vajra=yaksa vidyā-rāja

頂礼します。金剛の(ように堅固な)夜叉(葉叉)なる明王よ(金剛夜叉明王)。

南無金剛界

南無大悲胎藏界

※五大明王の真言・サンスクリットに還梵された資料が見当たらないため、『次第』に表記されている悉曇をもとに、僭越ながら還梵をして和訳をした。なお、『次第』の悉曇の表記にはところどころが見られる。

次 入我我入觀 法界定印

想え我が身本尊の身と成る。十九種の文字を以て身の諸分に布す。

のうまく さらば・たたぎやていびやく さらば・ぼけいびやく さらばた おん あしやら・
せんた

けん きん き かん き たらた うん こ かん のう まん たん まん たん とん た
かく かん かん そわか

Namah sarva=tathāgatebyah sarva=nukhebyah sarvathā om acala=canḍa

Kham Khim Khi Hām Hi Trai Hum Ho Hām Mo Mam Tam Mam Tom Ta Hah Ham

Ham svāhā

すべからく、一切(の方向)に顔を向けている、一切の如來に頂礼します。オーン(帰依します)、不動なる忿怒(尊)よ。

頂、頭、頭の左、額、両耳、両眼、両鼻、口、舌、両肩、喉、両乳、心、臍、両腸(腹)、腰、両股、両膝、両足、成就あれ。

自身即成本尊身

次本尊加持

先根本印 独鉦印 火界咒 四処加持 一返

のうまく さらば・たぎやていびやく さらば・ぼっけいびやく さらばた たらた せんだ・
まかろしやだ けん ぎゃき ぎゃき さらば・びきんなん うん たらた かん まん

Namah sarva-tathagatebhyah sarva-mukhebhyah sarvatha trai canḍa-maha-roṣaṇa khaṇ
khāhi khāhi sarva-vighnaṃ hūṃ trāi hāṃ māṃ

すべからく、一切(の方向)に顔を向けている、一切の如来に頂礼します、トラット。怒りの
絶大な忿怒(尊)よ、カン。一切の障礙を食い摧きたまえ、食い摧きたまえ、フーン、トラッ
ト、ハーン、マーン。

次 劍印 劍印 慈救咒 一返

のうまく さまんた・ばざらだん せんだ・まかろしやだ そわたや うん たらた かん
まん

Namah samanta=vajraṅgam caṇḍa-mahā-roṣaṇa sphoṭaya hūm trāi hām mām
遍く金剛部諸尊に頂礼します。怒りの絶大な忿怒(尊)よ。破摧したまえ、フーン、トラッ
ト、ハーン、マーン。

次 正念誦 作法如常

想え塵垢の身を遠離す 金剛合掌

おん へいろしゃのう・まら そわか

Om vairocana-māla svāhā

オーン、遍く照らす華鬘よ、成就あれ。

我欲拔濟無餘界

おん ばざら・んきや・じやは・さんまえい うん 念珠回転しつ 三返

Om vajra-guḥya=jāpa=samayē hūm

オーン、金剛の(ように堅固な)秘密の念誦の境地で フーン。

慈救咒(前にあり) 両手外に向け珠を左から右へ突きやりつつ 慈救咒七返

次いで両手を向い合せ 珠を同様に突きやりつつ 慈救咒百八返
のうまく・さまんだ・ばざらだん せんだ・まかろしやだ そわたや うん たらた かん
まん

観念せよ、本尊の心月輪の上に

修習念誦法、 珠を蓮華合掌に入れ 作法如常

次 本尊加持

先根本印(前にあり) 独鈷印 三返

のうまく・さらば・たたぎやていびやく・さらば・ぼつけいびやく・さらばた たらた せんだ・
まかろしやだ けん ぎゃき ぎゃき さらば・びきんなん うん たらた かん まん

次 劍印(前にあり) 劍印 三返

のうまく・さまんだ・ばざらだん せんだ・まかろしやだ そわたや うん たらた かん
まん

次 字輪観 法界定印(弥陀定印)

想え、心月輪上にカン字有り、是れ因業不可得の義なり。

次本尊加持

先 大日印言 智拳印 四処加持 三返

おん ばざら・だと ばん

Om vajra-dhātu van

オーン、金剛界よ ヴァン。

次 本尊根本印 独鉈印 三返

のうまく さらば・たぎやていびやく さらば・ほっけいびやく さらばた たらた せんだ・
まかろしやだ けん ぎゃき ぎゃき さらば・びきんなん うん たらた かん まん

次 劍印 劍印 三返

のうまく さまんた・ばざらだん せんた・まかろしやだ そわたや うん たらた かん
まん

次 佛眼印明 印如常 七返

のうぼろ ばぎやぼとうしゆにしゃ おんろろ そぼろ じんばら ちしゆた した
ろしやに さらば・らた・さだにえい そわか

Namo bhagavata usñiṣa om ru ru sphuru jvala tiṣṭha siddha=locane sarva=artha=sādhane

syaha

世尊、仏頂に帰依します。オーン、ル、ル、遍満したまえ、輝きたまえ、起ちたまえ。神通力ある眼をもつものよ、一切の利益を成就するものよ、成就あれ。

次 散念誦 作法如常

佛眼真言(前にあり) 印如常 二十一返

のうぼう ぼぎやばと うしゆにしゃ おん ろろ そぼろ じんばら ちしゆた した
ろしやに さらば・らた・さだにえい そわか

大日真言(前にあり) 智拳印 百返

おん ぼざら・だと ばん

本尊火界咒(前にあり) 百返

のうまく さらば・たたぎやていびやく さらば・ぼつけいびやく さらばた たらた せんた
まかろしやだ けん ぎゃき ぎゃき さらば・びきんなん うん たらた かん まん

慈救咒(前にあり) 千返

のうまく さまんだ・ぼざらだん せんた・まかろしやだ そわたや うん たらた かん

まん

一字咒 劍印 百返

のうまく・さまんだ・ばざらだん かん

Namah samanta=vajrāṅgān haṃ

遍く金剛部の諸尊に頂礼します。ハーン。

降三世咒 降三世印 百返

おん そば・にそば うん ばざら うん はつた

Om śumbha niśumbha hūm vajra hūm phat

オーン・シユンバ(尊)よ、ニシユンバ(尊)よ、フーン。金剛(堅固なるもの)よ、フーン。パット。

軍荼利咒 印如常 百返

おん あみりてい うん はつた

Om amrite hūm phat

オーン、不死(甘露)なるもの(尊)よ、フーン。パット。

大威徳咒 印如常 百返

おん しゅちり きゃら・ろは うん けん そわか

Om srih kala=rupa hūm kham svaha
オーン、ストリーヒ(種字)。青黒の容色のもの(ヤマーンタカ、焰鬘得迦)よ、フーン、カン、
成就あれ。

金剛夜叉咒 印如常 百返

おん ばざら・やきしゃ うん

Om vajra=yaksa hūm

オーン、金剛の(ように堅固な)夜叉よ、フーン。

大金剛輪(前にあり) 印如常 七返

のうまく しつちりや・ちびきやなん たたぎやたなん あん びらじ びらぢ まか・
しゃきやら ぼじり さたさた さらてい さらてい たらい たらい びだ・まに
さんばんじゃに たらまち・しつた・きりや たらん そわか

一字金輪 印如常 百返

のうまく さまんた・ぼだなん ぼろん

Namo samanta-buddhanam bhūm

遍く諸仏に頂礼します。ブルーン。

祈願 置珠

次後供養印明（後供養、理供） 火舎の左の供具 印如常 各一返

先塗香

のうまく さまんだ・ぼだなん びしゆだ・げんど・どはんばや そわか

次華鬘

のうまく さまんだ・ぼだなん まか・まいたりや・びゆどぎやてい そわか

次焼香

のうまく さまんだ・ぼだなん たらま・だと・ぼどぎやてい そわか

次飲食

のうまく さまんだ・ぼだなん あらら・きゃらら・ばりん だだび ばりん だてい まか・

ばりく そわか

次燈明

のうまく さまんだ・ぼだなん たたぎやた・あらし・そはらだ・ばんぼさのう きやぎやのう・

だりやそわか

次 事供(後供養) 火舎の左の供具 作法前供養に同じく如常

先 塗香

次 華鬘

次 焼香

次 飲食

次 灯明

次 闕伽(前にあり) 作法前供養に同じく如常

のうまく・さまんだ・ぼだなん ぎやぎやのう・さんまさんま そわか

以本清浄水

次 後鈴(前にあり) 作法如常

おん ばざら・さとば あく

おん ばざら・げんだ としゃ こく

次 四智讚(前にあり) 垂帶 舞儀 拍掌 作法如常

おん ばざら・さとば・そうぎやらか ばざら・あらたんのう まどたらん
ばざら・たらま・きややたい ばざら・きやらま・きやろ はんば

次 本尊讚(前にあり) 金剛合掌

のうまく さらば・ほだ・ほうじ・さとぼなん さらばたら そうぐそうびだ・びじゃ・らし
べいのうほう そとてい そわか

次 普供養(前にあり) 印如常

おん あぼきや・ほじゃ まに・はんどま・ばじれい たたぎやた・びろきてい さんまんだ
はらさら うん

次 三力偈 印如常

以我功德力

次 小祈願 金剛合掌

普供養摩訶毘盧遮那佛

次 禮佛(前にあり) 金剛合掌

南無摩訶毘盧遮那佛

なも ありや・あしやらのうた びじゃ・らんじゃ(不動明王)

なも ばざら・そぼに びじゃ・らんじゃ(降三世明王)

なも ばざら・ぐんだり びじゃ・らんじゃ(軍荼利明王)

なも ばざら・えんまんどくきや びじゃ・らんじゃ(大威徳明王)

なも ばざら・やきしや びじゃ・らんじゃ(金剛夜叉明王)

南無金剛界

次 廻向 金一丁

所修功德

次 廻向方便 金剛合掌

懺悔隨喜)

次 解界(前に同じ) 印明如常

先 大三昧耶

おん しょうぎやれい まか・さんまえん そわか

次 火院(金剛炎)

おん あさんま・ぎに うん はった

次 虚空網(金剛網)

おん びそほらた らきしゃ ばざら・はんじやら うん はった

次 結果

おん そば にそば うん ぎやりかんだ ぎやりかんだ うん ぎやりかんだはや うん
あのうや こく ばぎやばん ばざら うん はった

次 四方結

おん さら さら ばざら・はらきやら うん はった

次 地結

おん きり きり ばざら・ばじり ほら まんだ まんだ うん はった

次 撥遣 華鬘の残り華一房を二中に挟む 一返 終つて華を華鬘器の向うの華の上部に置く
想え本尊聖衆を送り奉ると

おん ばざら・ばきしゃ ぼく

Om vajra=moksa muh

オーン、金剛の(ように堅固な)解脱よ、ムフ

次 三部被甲等(前にあり) 各明一返

先 佛部三昧耶

おん たたぎゃと・どはんばや そわか

次 蓮華部三昧耶

おん ほんどぼ・どはんばや そわか

次 金剛部三昧耶

おん ばそろ・どほんばや そわか

次 被甲護身

おん ばざら・ぎに・はらちはたや そわか

次 普禮(前にあり) 金剛合掌 金一丁

おん さらば・たたぎやた・はんなまんなのう きゃろみ

初心は珠を取り 少々摺つて左に持ち金一丁 次第を収め 前供を引いて直し 華鬘器を塗香器に重ね その上に闍伽器を重ね 散じた華を闍伽器に入れ 闍伽の盤の水も闍伽器に入れる 後供もまた同じくして下礼盤

晴の時は助衆至心廻向の内に解界・撥遣等を結誦し 左手に珠を持ち 帰命頂礼等の終わるを待つて金一丁

次 出堂

ヒンドゥー伝統の古典ヨーガ(『ヨーガ・スートラ』)にはじまり密教観法の「不動法」まで、多少の実体験をもとに探究してきて思うことは、同じインド由来の瞑想行でも、ヒンドゥー・ヨーガは、グル(尊師)に従い、禁欲生活に入り、さまざまな坐法を組み、止息・保息を含む呼吸法を行い、意識の表層に出入する心理的現象を抑制して心を静穏にし、感覚作用を鎮め、意識の一点集中から超意識の無意識状態においてシヴァ神などの「真実在」と冥合する行法であり、非バラモン系の仏教ヨーガ(瑜伽行)も、ヒンドゥー・ヨーガと同様の一点集中(「止」)に真理的な智慧による認識対象の正しい観察(「観」)を加え、大乘の唯識(瑜伽行)派では「止」と「観」の共時的な行法(双運)を行い、中国で発展した禅も中国で成立した天台も「止観」行を継承して超意識状態の直接経験を究極としたが、仏教史最終盤の密教になると、ヒンドゥー教のプージャー(供養儀礼)などの影響や、ムドラー(印、印契、印相、手印)やマントラ(真言)やマンダラ(曼荼羅)などタントラ的なシンボリズムによつて儀礼化され象徴化され儀軌化された「サーダナ」(成就法)となり、「止観」行の直接経験ではなく、師(阿闍梨)の口伝を前提とするもの、形式化・作法化された儀軌をそのままなぞる間接経験(疑似体験)となった。対照的なのは、ヒンドゥー・ヨーガや仏教ヨーガ(瑜伽行)が瞑想法の実際(儀軌)を残さず、経(スートラ)・頌(ガータ)・論(シャヤーストラ)のかたちで瞑想状態の講説書や綱要書しか残さなかったのに対して、密教ヨーガ(瑜伽)は瞑想状態の講説書や綱要書を残さず行法の実際(儀軌)を残したことである。

密教のシンボリズムは、大師の「阿字本不生」など密教的な言語哲学にも色濃く現われ、また「三密加持」の実際は観念操作であつて直接経験ではなく、「生仏不二」はアナロジ(マクロコスモ

ストミクロコスモスの照応)である。私たちが事相で修法(念誦法・供養法・護摩法など)と言っているものも、日常意識が少し緊張した程度の状態での儀軌作法(観念操作)による疑似体験であり、超意識の「ゾーン」(＝空)の状態での直接瞑想経験ではなく、ましてや「成就 siddhi」ではない。

この「不動法」は、不動明王の「火生三昧」の疑似体験(アナロジ)の儀軌である。密教行者にとつて「火生三昧」とは何か、忿怒形とは何か、三鉈劍・縋索とは何か。疑似体験(アナロジ)もくり返し行じれば、その先にホンモノが見えてくるはずである。「散念誦」の千八十返にはそれ相当の意味がある。